彫刻家とその妻（一幕）

人物

彫刻家。
彫刻家の妻。
大學を出たばかりの青年。

（かなり裕福に暮らしてゐる彫刻家の製作室の内部。正面は全部ガラス戸になつて居り、月雲間を出づれば、それを通して外廊の欄干、秋らしくなつて來た草木などを見ることが出來る。室内左側にドア一つ、右側にドア一つ窓一つついてゐる。大きな電燈を載せた中央の卓をめぐつて椅子二三脚。その一つに、今しがた旅行から歸つて來たばかりの彫刻家が腰を下して、煙草を燻らしながら、左手奥に立つてゐる大きな大理石の立像を眺めてゐるところにて幕上る。やがて、左側のドアをあけて彫刻家の妻がはひつて來る。）

妻。御召更になればいゝのにね。

彫刻家。（ふり返り、妻の持ち來れるコニャックの壜を見て微笑しながら）兎に角、こちらが當面の急務だからな。

（コップを取上げ、それに酒をつがせる。）

妻。平野水でも持つて參りませうか？

彫刻家。（旨さうに一口嘗め）いや、この儘で結構。

（再び大理石像の方に向き直り、貪るやうにして眺めてゐる。）

妻。貴方、もう御氣がつきましたの？

彫刻家。（ふり返り）え？　何か言つたね。

妻。御留守中に飛んだお粗相を致しました。

彫刻家。何をしたんだ？

妻。貴方があれほど、何物よりも大切にしていらしたあの立像の、左の手を折つてしまひました。

彫刻家。（はじめて合點が行つたかの如く）さうか、成程さうか！

妻。私は貴方が、私を御怒りになるよりも、御自身でどんなに御失望なさるかと思つて……

彫刻家。（やはり妻の言葉に頓着なく）いや、それで分つたよ！

妻。分つたと仰しやると？

彫刻家。今度歸つて見ると、この立像全體の與へる印象が、旅行に出掛ける前と全然變つてゐるんだ。それまでどうしても取去ることの出來なかつた餘計なものが、綺麗になくなつてゐるんだ。

妻。（稍や、意外らしく）餘計なものが！　綺麗になくなつて！

彫刻家。さうさ。最も俺らしい缺點が、或は最も俺らしくない缺點が取れてしまつて、本當の作品になつてゐるんだ。少くとも現在の俺の仕事としては、一通り完成した物になつてゐるんだ。

妻。では、あの手がかけた爲めに一層立派になつたと仰しやるのね？　皮肉でも、じやうだんでもなしに。

彫刻家。俺は昔から、そんな廉つぽい皮肉や、氣の利かないじやうだんは言はない漢だ。俺は心からお前に御禮を言ふよ。

妻。でも私は……

彫刻家。（妻の言葉を耳にも入れないで）お前

がよし、たゞの過失からでなく、故意に、悪意で以て壞したのであつても、俺は御禮を言つたと思ふね。

妻。（椅子にかけて）私はもう、本當の事を申し上げます。

彫刻家。（妻の顏をまともに見て）お前は少し興奮してゐるやうだな。

妻。興奮しないぢやゐられません。私は實際、故意に惡意で以て壞したのです。しかも御禮を仰しやつて頂く爲めでなく、叱つて頂く爲めに、怒つて頂く爲めにしたのです！

彫刻家。（手に持つてゐたコップを徐かに下へ置いて）なに？　怒つて頂く爲めに！　たしかに然う言つたね？

妻。たしかに然う申しました。それを又何故だと仰しやるんでせうか？

彫刻家。うむ。

妻。なぜと云つて、私は貴方の御機嫌を惡くしてでも貴方の御側にこの私がゐるといふことを思ひ出して頂きたかつたのです。長いこと貴方の藝術の爲めにといふよりも、此一年近くは殆んどあの立像一つの爲めに、すつかり忘れてしまつていらつしやる此私を、此私が、どんなに寂しい物足りない日を送つて來てゐますか、それを見て頂きたかつたのです。それに貴方の眠つてゐる注意を呼びさましては上げたかつたのです。

彫刻家。（自分で自分に言ふやうに）さうか。

妻。（興奮してしまつて、他の言葉を見出し得ない人のやうに）さうです！

彫刻家。だが、それにしちや、大分思ひ切つた手段に訴へたものだな。

妻。もう少し穩健な常識的な手段も、色々やつて見ることは見ましたの。けども、みんな役に立ちませんでした。それほど貴方は御自分の御仕事に熱中して、私を忘れてしまつていらしたのです。

彫刻家。さうかなあ。

妻。結婚の前と後とでは、貴方は全然別々の方ですわ。（昔を追想しながら）あんなお話をして下すつて、あんな御手紙をあんなに度々下すつて、そしてあれほどの犧牲を拂つてまで、一緒になつて下すつた貴方が！　その貴方が今は如何でせう。昔の通りだと、さう仰しやることが出來ますか？

彫刻家。さう云はれて見ると……成程、少々閑却してゐたといふものかな。

妻。それに一番ひどいのは、私自身がこんなにまで置いてけぼりを食つてるのに、私をモデルに御作りになつたあの立像が、あんなにまで可愛がられてゐることでした。つまり忌々しかつたのです。忌々しいから壞したのです。

彫刻家。一通りの理窟は分つたが、そんな積りであれを壞した位なら、他にもまだ、俺を困らせるつもりの事を色々とやつてゐさうに思へるね。

妻。えゝ、してゐないこともありませんわ——大して惡い事でもないけれど。

彫刻家。だが、その告白を聽く前にきいて置きたい事がある。壞した大理石の手はどう始末した？

妻。或る人に頼んで棄てて貰ひましたわ。

彫刻家。此場合或る人ではいけない。誰だ？

妻。貴方のいつも仰しやる『兎』さんですの。

彫刻家。あゝ、あの男か。（微笑しながら）實際兎のやうな印象を與へるねえ。

妻。丁度、あの人が來てゐたものですから——

彫刻家。先づあれを壞して貰つたね？

妻。えゝ。私の爲めに壞して呉れましたわ。私の爲めには何でもして呉れるやうになつてゐましたから。

彫刻家。成程ね、そしてあの男が持つて歸つて呉れたんだね？

妻。えゝ——途中で、川の中へでも投げ込んでくれる筈で。

彫刻家。然るに、實際は投げ込まなかつたと云ふんだらう？

妻。さうですつて。その儘持つて歸つて、大切に藏つてゐるんですつて。

彫刻家。あの手でも、やつぱりお前をモデルにしたんだからな。

妻。あの人が、丁度その通りに言つてゐましたわ。

彫刻家。それ位ならば、まだ色々の物をお前から貰つて行つたね？

妻。えゝ、隨分馬鹿馬鹿しいものまで。そして私から持つて行つて上げたことも、置いて來たこともありますわ。

彫刻家。（笑ひながら）それでも、お前の一番大切なものだけは、置いて來なかつたと云ふんだね？

妻。（同じく笑ひながら）さあ。どうですか。

彫刻家。兎に角、私の二ヶ月の旅行中にお前達は、色々の飯事をして遊んだんだね？

妻。貴方はそれを惡いと仰しやるの？

彫刻家。さあ、待つてくれ。

妻。貴方は私を疑ふと仰しやるの？

彫刻家。待て待て。

妻。（せき込んで）あの人と一緒に暗い濠端を歩いたと云つたら、あの人と二人つきりで夜の一時過ぎまでも話し込んだと云つたら、あの人の叔母さんから心配されるほど親しくしたと云つたら、それをどう仰しやるの？——貴方は。

彫刻家。大抵の人ならば、俺の地位に立つてゐては、幾分か不快に思ふことを免れまいと思ふね。

妻。そして貴方は？

彫刻家。勿論俺も御多分に漏れないんだ。

妻。さう伺つて安心しましたわ。私の目的が達しられたわけですもの。

彫刻家。お前の目的？　わざわざ俺を不快にするつもりの、俺に嫉妬をやかすつもりの？

妻。えゝ。

彫刻家。さうか。だが、藥が利き過ぎはしなかつたかな。

妻。あの人が眞劍になり過ぎたことですか？

彫刻家。そして私が持てあましたことですか？

妻。貴方はそれを惡いと仰しやるの？

と、そんな事に頓着はない。俺はたゞ、お前自身までが本氣になり過ぎはしなかつたかしらと、それを問題にしてゐるんだ。

妻。若し私が、本氣に……本氣になり過ぎてゐたのなら？

（彫刻家、それに答へないで徐かに起ち上り、ガラス戸の方へ歩いて行く。妻同じく起つてあとを追ふ。）

若しさうだつたら、どう仰しやるの？　どうなさるの？——貴方は。

彫刻家。（興奮したらしい表情を出來るだけ見せないで）それを俺にきくのか。

妻。えゝ。

彫刻家。（唾棄するやうに）馬鹿な！

（二人とも暫く無言。彫刻家は兩手を背へ廻し、片足を踏み出し、先程から明るく月光の射して來た外の景色を見ながら立つてゐる。妻は片手に胸を押へて、彫刻家の後姿を見ながら立つてゐる。）

妻。（やがて見物席の方へ向き直り、大きな太息を吐いて獨白に近く）やつぱり駄目ね。柄にないんだもの！

（彫刻家、右側のドアの方へ歩いて行く。）

（稍や、狼狽して）あら、どつかへいらつしや

るの？

彫刻家。そこいらを歩いて來る。

妻。一寸、待つて下さいな。御願ひですから。

（彫刻家、無言の儘に卓の近くまで引き返して來る。）

貴方は本當に……本當に怒つてらつしやるの？　私のじゃうだんで言つたことまで眞面目に取つてらつしやるの？（短き間）あら……眞面目ですのね。どうしませう。困つたわ。

彫刻家。それは俺の方からも言ひたい言葉だ。

妻。え？　何と仰しやつたの？

彫刻家。この俺にもどうしていゝか分らないんだよ——ただ笑つて濟ましていいものか、それとも大眞面目にこだはつて考へて見るべきものか。

妻。でも貴方は、嫉妬……私を疑ふやうな事なんぞ、これまでつひぞ仰しやつたことがないぢやありませんか。

彫刻家。疑はしいも〻にぶつかるまでは、俺でなくたつて疑ふまいよ。

妻。でも貴方は、私達のあのお飯事が、どんな動機からはじめられたかつてことを、十分御解りになつてるぢやありませんか？　それとも、それとも……

彫刻家。それは解つてゐる。お前はあの立像の手を壞したのと同じ動機から、お前達の飯事をもはじめたのだよ。

妻。それならば、疑はしい事なんか、なんにもないわけぢやありませんか？

彫刻家。ところが然うは行かない。

妻。どうして？

彫刻家。ウソから出た誠と云ふ言葉がある。

妻。（機械的に口のさきで反復して）ウソから出た誠。

彫刻家。それなんだ。（稍や强く）手段として始めた事がいつの間にか目的になつてゐると云ふのは、ちつとも不忠義な話ではないからな。

妻。まあ！　本當に然う思つてらつしやるの？　私があんな、あんな『兎』さんなんぞと……

彫刻家。俺は、ただ信じられる事を信じ、疑はしい事を疑ふだけなんだ。

妻。だけど、あんまりよ。あんな、なんにも出來ない、出來さうな見込みもない人なんぞ、私が輕蔑しきつてることは、ようく御分りになつてるんぢやありませんか？

彫刻家。尊敬するしないと、愛する愛しないとは別々の話だ。それにお前がこの男のどこかに、尊敬すべきものを認めてゐないとも限らない——よしそれに百倍して、輕蔑すべきものを他に認めてゐようとも。

妻。むつかしい理窟の分らない私は、ただ事實だけを申します。あの人はやつと大學を卒業しただけの、何の取柄もない平々凡々の人なんです。その上品性も——近頃突然にあの人不相應なお金がはひりましたので、あの人は大變なケチン坊だつてことまで分りました。

彫刻家。そんな事は、此場合に關係のない話だ。

妻。いゝえ、關係がないことはありませんわ。私は何よりもケチン坊が嫌ひですもの、盜みをしたり騙りをしたりする人以上に。そして實際に、あの人はそれ位の惡い事を平氣でやりかねないんです。

彫刻家。お前はまさか、まるつきりの出鱈目を言つてるんぢやあるまいね？

妻。事實でない事は申しません。あの人は私書僞造私印盜用とかつていふ恐ろしい罪を犯してお金を拵へたのです。

彫刻家。そんな祕密を、あの男自身の口から漏らしたのか？

妻。ええ。あの人は私を信じてゐましたから。

彫刻家。信じると云へば、お前は一體そんな話をしてきかして、俺の疑を釋くつもりか、それとも一層增させるつもりか？

妻。私はあの人をどんなに氣味惡がつてるか、どんなに恐がつてるか、それを解つて頂きたいんですわ。それを解つて頂けば、貴方の疑だつて消えるぢやありませんか。

彫刻家。それは駄目だ。

妻。どうして？

彫刻家。男はどんなに醜い女をでも愛しないものでない。女はどんなに恐ろしい男をでも愛しないものでない。

妻。でも、あの人は本當に恐ろしい事をする人です、しかねない人です。（壁に耳あるを恐れるやうな樣子をして）あの人は——人殺しをしようとしてゐます！

彫刻家。（流石に驚いて、けれども聲を押へて）人殺し？

（妻、卓に近づき、一つの椅子にかける。彫刻家も無意識に引き寄せられて近くの椅子にかける。）

妻。しかも誰を殺すんだと思ひます？

彫刻家。それは俺の方から言ふことだ。

妻。（震ひしながら、良人を眞正面に見て）貴方を！　貴方を殺すんです！

彫刻家。（覺えず椅子から跳び起つて）なに！　俺を？　この俺をあの『兎』の奴が？

妻。ええ。

彫刻家。（突然に笑ひ出し）は、は、は……じやうだんはよして呉れ。俺は眞面目に聞いてゐたんだ。

妻。私も眞面目に申し上げてるんですわ。

彫刻家。眞面目だ？——そんな話が！

妻。ええ。

彫刻家。（再び徐かに椅子へかけて）あの男がこの俺を殺す、それは何の爲めだ？

妻。（腰を浮かして椅子を後へ引くやうにしながら）私の爲め……私に頼まれたのです！

彫刻家。これは面白い！　お前が『兎』の奴に頼んで俺を殺させる。そしてそれが眞面目な話だと云ふんだな。

妻。私はそれよりほかに……方法がなくなつたのです。

彫刻家。なに？　何とか言つたね。

妻。私が、私達のお飯事を切り上げようとしても、どうしても切り上げさして呉れないのです。はじめの内はそれほどでもなかつたあの人が、私の逃げ腰を見てからは、無暗に熱中して來たのです——だんだんと、狂人のやうな後前見ずで、あの人特有の執拗さで！　そして、いくら逃げようとしても逃がして呉れませんし、いくら遠ざけようとしても遠ざかつてくれないのです。（短き間）それで最後に、最後の手段として私は、あの人に言つてやりました——

彫刻家。何と言つてやつた？

妻。私の爲めに良人を殺して下さるか、でなければ二人つきりで御目にかかることなんぞ、これつきりにしませうつて。

彫刻家。（覺えず大きく息を吐いて）さうか。

妻。これに對しては、いかにあの人でも、わけなく兜を脱ぐことと思つたのです。

彫刻家。（熱心に）ところが——

妻。ところが、あの人もさうさう無造作にはだまされてしまひません。逆樣に私がどれだけ本氣で然う言つたかと、何より先づ駄目を押すのです。そして駄目を押されれば押されるほど私は愈々本氣らしく見せなければなりません。

彫刻家。それは合理的だ。

妻。其結果あの人は、私の要求を眞劍なものだ

と信じるやうになりました。

彫刻家。そしてこの俺を殺せと云ふお前の要求を容れたんだね？

妻。さうです。（強ひて微笑しながら）この三日ばかりは、その爲めに苦んでるんですわ。

（二人とも暫くの間無言。彫刻家は思ひ出したやうに自分で酒をつぎ、味もなげに賞めながら考へ込んでゐる、妻はお酌をしてやることをも忘れ、茫然彫刻家の動作を見入りながら、同じく考へ込んでゐる。）

だけど、これだけお話ししてしまつたら、私があの人のことなんぞ、眞面目に思つちやゐないつてことだけは、お分りになつて下すつたでせうね（短き間）ねえ、貴方、それだけのことはもう、分つて下すつたでせうね。

彫刻家。うん、分つた、と言つて上げたいところだが、實際は依然として分らないね。

妻。（半ば意外らしく、半ば不平らしく）さうですか。

彫刻家。寧ろ、色々と説明や辯解を聞かされた爲めに、愈々分らなくなつて來たやうだ。

妻。（再び）さうですか。

彫刻家。此上とも口先でばかり辯解を重ねるのは、お前に取つても無益な事だらうし、俺にももう我慢の出來ない事だ！（短き間）お前が潔白であつたといふことは、實際の、生きた、切れば血のほとばしる、事實で以て證據立てて貰ひたい！

妻。事實と仰しやると？

彫刻家。必ずしも過去の事實を以てせよとは言はない。これからのお前の行爲で以て、新しい事實を、俺のこの胸の透くやうな事實を、俺の目の前に突きつけて呉れてもいいのだ！

（此時、偶然にコップが卓から滑り落ち、ガチャリと音を立てて壊れる。）

妻。（戰慄しながら起ち上り）今度は貴方が、あの人を殺せと仰しやるんですか？ 私にあの人を殺してくれと仰しやるんですか。

彫刻家。なに？『兎』の奴を殺す？

妻。ええ。さう仰しやるんでせ？ ね。

彫刻家。（吐き出すやうに）馬鹿な！ そんな事がなんになる？

妻。少くとも、私があの人を殺せるか、それとも殺せないかが分ります。

彫刻家。殺せなかつたらそれこそ不思議だ。人はどんなに愛してゐる異性をでも殺し得るんだからな。それどころか、愛してゐる爲めに殺す場合さへもある。

妻。（椅子の背につかまり、眼をつぶりながら）私は、いつそ自分で自分を殺します！ それが貴方に満足を與へるんでしたら！

彫刻家。お前の自殺が俺に満足を與へる？

妻。それが私の潔白を…（俄かに涙聲になりながら）最後まで貴方の自實な妻だつたといふことの、何よりも確實な證據にはならないでせうか？

彫刻家。此場合涙なんぞに訴へることはよしてくれ。（調子をかへて）お前の自殺は、どんなにしてもお前が俺の疑ひを釋き得なかつたと云ふことの、有力な證據にはなるかも知れない。それが俺にどんな滿足を與へるだらう？

妻。（椅子につかまりながら跪き倒れて）もう駄目です。私は……どうすればよいのです？（取りみだして再び）どうすればよいのです？

（二人とも暫くの間無言。彫刻家、やがて起ち上り、妻のそばを過ぎ、彼女を見返り、左側のドアから出て行く。妻は依然として其儘の姿勢を保つてゐる。此頃より、月雲に入つて漸く暗し。やがて、

一挺のピストルを提げて來た彫刻家が、そのピストルをガチャリと卓の上に置く。その音に驚き、彼の妻は跪いた儘に上半身を起して卓の上を見る。）

（ピストルと彫刻家の顔とを見比べながら）ピストルですのね。

彫刻家。他に名案もなかつたら、（ピストルをゆびさし）こいつで一つ、遣つ付けて貰はうよ。

妻。貴方を？　そして私が？

彫刻家。いや、お前自身よりも、あの男にやらして呉れ――お前達の陰謀通りに。

妻。まあ！

彫刻家。それが容易ならぬ仕事であることは、俺自身も知つてゐる。しかし、お前が本當に潔白であつたなら、お前はそれに堪へ得る筈だ。堪へ得なければ潔白でなかつたのだ。

妻。（床より起ち上り）貴方は、そ、そんなにしてまでも……知りたいと仰しやるんですか？――私が本當に潔白か、潔白でないかつてことを！

彫刻家。俺が俺の家で、寢椅子の上で、空つぽになつたコニャックの壜のそばで、しかも俺自身のピストルで（顔をゆびさして）此處を打ち貫かれて死んだとする。それが自殺と思はれなかつたら、それこそ不思議といふものだ。

妻。何の爲めに、そんなに意地惡らしい註文をなさいます？

彫刻家。お前が潔白でない爲めに、お前の心がやましかつたらば、そのやましさが一層加はるやうにと思つてだ。

（二人とも暫くの間無言。妻は一脚の椅子を引き寄せ、見物席へ背いてかけ、仰向くやうにして考へてゐる。彫刻家は腕組みをして彼女の横顔を見守つてゐる。）

妻。（顔だけ彫刻家の方へふりむけて）幾時でせうか？

彫刻家。（時計を出して見て）十時十分過ぎ。

妻。それではもう、あの人の來る時刻です。明日と云はず今晩の内に、貴方の知りたいと仰しやることを（寧ろ早口に）十分に知らして上げます！（短き間）そんなにしてまで、そんな酷い事をしてまで、私を……私の潔白を。

（彫刻家は卓の上のピストルを取上げて右側窓の下あたりに置かれたる寢椅子に歩み寄り、ピストルを枕元に置いてごろりと横になる。）

彫刻家。その壜に酒が殘つてゐては面白くない。からにして呉れ。

（妻、夢遊病者の如く起ち上り、酒を棄てるべく右側ドアをあけて外に出る。外はまたもや月明となつてゐる。）

妻。（急ぎ足に、けれども物音を立てないやうに引き返して來て）あの人が來たやうです。用意をして下さい。

彫刻家。（空壜を受取り、寢椅子の下へ無造作に轉がしながら）俺はただ醉拂ひになつて前後不覺にねてゐればいいのだ。

（彫刻家は仰向けになり、その儘目をつぶつてしまふ。それを見ながら妻は後退するやうにしてドアへ近づき、再びそれを開いて外へ出る。それから正面のガラス戸の向うを、小走りに左へ駈けぬけるのが見える。問もなく『兎』と綽名された青年を連れて引き返して來る。二人はガラス戸の向うから室内をのぞき、彫刻家のねてゐるあたりを指さし、暫く私語を交したる後、右側のドアから廻つてはひつて來る。）

青年。（彫刻家のねてゐる方を見ながら）餘程

澤山飲んだのですか？

妻。えゝ、平生の倍位。その上疲れてゐましたからね。

青年。だが、少し變ですね――こゝで貴女と御話するのは。それに特別に祕密にしなくちゃやならないあの事に就いての御話なんですから。

妻。祕密のお話は、却つて此處の方がよござんすわ。まさか此室で惡事の相談なんぞしようとは誰も思ひますまいし、（彫刻家を指さし）此人は此人で、椅子から轉がり落ちても氣が附かない位、正體なしになつてますからね。

（斯く言ひながら妻が椅子にかけると、青年もまた椅子にかける。）

青年。ところで奥さん、私と云ふ人間はよくよくの腰抜ですね。

妻。（意外らしい表情を幾分誇張して）まあ、何を仰しやるの？　突然に！

青年。私は先達て貴女の前に、立派に誓つたあの言葉を、取消しに……綺麗に取消しに來たのです。

妻。取消しに？（彫刻家の方を一寸ふり向き）あの時の御約束を？

青年。私に對して何等の敵意をも有つてない、疑つてさへもゐない人を、到底私の手ではどうにもなりません。その爲めに貴女から信じて頂けなくなると云ふ、それも殆んど堪へ難い事ではありますが、しかし、まだしもその方を選びます。私はあの時の間違つた勇氣と決心とを、本當に心から悔いてゐるんです。

妻。貴方は後悔してゐると云んですね？

青年。さうです。

妻。人間の後悔は、大抵手後れになつてからのものですよ。

青年。え？　何と仰しやいました？

妻。生憎と貴方の後悔も、もう間に合はないと云ふんですわ。

青年。（半ば自分自身に問ふ如く）間に合はない？

妻。（椅子から起つ、彫刻家をゆびさしながら青年へ）此人はもう私達の陰謀を知つてしまひました。『陰謀』と云ふのも此人の使つた言葉です。

青年。えッ！（腰をぬかした人のやうな醜い起ちかたをして）然うですか！

妻。無感覺のやうに見えながら、神祕的に敏感な此人の神經に、たうとう喚ぎつけられてしまつたのです。そしてあの鋭い頭で、息をつく間もなく疊みかけて詰問されたのです。其結果、此人は私の口から、一切の事を聞いてしまつたのです。

青年。（喪心したやうに）然うですか！

妻。此人が醉から醒めたときは、殘忍な恐ろしい復讐がはじまるんです！

（青年、覺えず一歩ばかり後へ退く。）

あの枕元のピストルは、私達の肉體を殺すだけかも知れません。けれども此人が、ナダ私達の肉體を殺すだけで、そんな手緩い事で滿足するでせうか？

（青年は半ば無意識に自分のポケットからピストルを引き出す。）

（青年の側へ歩み寄る、その手にしたるピストルに指頭を觸れながら）御自分の臆病なことを誇りにしてゐる貴方は、それで以て御自分の胸をでも打ちぬく御積りですね。

青年。（彫刻家の方へ狂暴な目を走らせながら）いや、私もそれほど臆病者ぢやない！

妻。それでは、そんな物を提げ廻ることは止して下さい　日觸りだから。

青年。三發の彈では三人の人間が殺せます。そして無駄遣ひはしない積りです！

（斯う言ひながら彫刻家のねてゐる方へ

進んで行かうとする。）

妻。一寸！　待つて下さい。ピストルは貴方のを使はないで下さい。私は自分でもまだ死にたくないし、貴方をも死なしたくないんですから。

青年。一人を殺して、あとの二人が生き殘つて行く！

妻。此人自身のピストルで、此人の額を打ちぬいて下さい――それが丁度此人の自殺だつたと思へるやうに！

（二人とも暫くの間無言。妻、彫刻家の枕元からピストルを持ち來り、茫然立つてゐる青年のピストルと取換へてやる。そして取り換へた青年自身のピストルを、卓の上にガチャリと投げ出す。その音を聞くと共に青年は、醉漢の如き歩調にてふらふらと彫刻家の寢椅子に近づき、震ひわなく手にてピストルのさきを彫刻家の額にあてる。）

（駈け寄りながら）一寸！　もう一度待つて下さいな！

青年。（彫刻家の顏を見つめた儘で）な、なんです？

妻。（彫刻家へ聞かす積りで）これでも、私が此人を殺し得ないと云ふんでせうか？　貴方は現在もうそのピストルの端を、此人の額にあててゐます。貴方が引金をひけばもうそれ切りです！

青年。私はもう頭が混亂してゐる。何しやる事が分らない！

（思ひ切つて引金をひく。けれども彈が出ない。取り上げながら銃器を檢め、外見上異狀なきをたしかめたので、再び彫刻家の額にあてて引金をひく。前同樣に彈が出ないのである。）

（舌打ちをしてピストルを床へはふり出し）駄目だ！　（卓の上を指さし）そらの奴を！

妻。（胸を押へてゐた手を取つて、ほつと大きく息を吐き）彈が出なかつたのは運命です。此上運命を試すことは止しませう！

（青年は彫刻家の妻の言葉を耳にもかけない如く、卓に駈け寄つて自分のピストルを取り上げようとする。）

（青年の手を押へて）それこそ駄目です。あの人の自殺になりません。

青年。（息遣ひを荒く）私はたゞ、殺しかけたものを殺すんだ！

妻。いゝえ。いけません。私達はその爲めに、私達自身を殺すことになります。

青年。（妻の手から脫れようと焦りながら）は、はなして下さい！

妻。いゝえ。放しません。あの彈が出なかつたのは勿論の幸です。彈が出たら其音で、周圍の人達は直ぐにも來ます。下手人の逃れる道はありません（短き間）賢い男と女とは、こんな處に愚圖愚圖してゐないで、この儘逃げて行つてしまひます――愛する二人が手を引き合つて、思ひ切つて遠い遠い處へ！　そして二人を歡んで迎へて呉れる、もつともつと廣い世界へ！

（斯く言ひながら、そして俯いてゐる青年の顏をのぞき込みながらピストルを青年のポケットへ嵌はせようとする。青年は人形使ひに使はるゝ人形の如く、そのピストルをポケットに押し込んでしまふ。）

いつぞやのあの公園の出口で待つてゐて下さい。二十分とは御待たせしません！

（斯う言ひながら、再び人形使ひが人形を使ふ如く、青年に帽子をかぶせ、スティックを持たせて、左側ドアから外へ送り出す。それからガラス戸の向うを通つ

て左へはひる二人の姿が見える。やがて彫刻家は、寢椅子の上にむつくと起き上り、床に轉がつてゐる空壜を拾ひ上げ、口にあてて喇叭呑みに餘滴を啗つてゐる。そこへ今度は左側ドアから彼の妻が、二つの大きなコップに水を入れて持つて來る。そして其一つを默つて良人に差出せば、良人も默つてそれを受取り呑む。妻もコップの一つを取り上げて一口呑む。）

貴方の御註文通りに致しました！

彫刻家。さうだ。これでいゝ。俺にはもう何の不滿足も殘つてゐない。

妻。その代り、私には大きな不滿足が殘りました。

彫刻家。お前に大きな不滿足が？

妻。貴方は知りたいと仰しやつた事をすつかり御知りになりました。けれども私は、私の知りたいと思つたことの半分をも知ることが出來ませんでした！

彫刻家。お前は、何を知りたいと思つたのだ？

妻。私の潔白か潔白でないかを知る爲めには、御自分の命を棄てる位、何でもないやうに仰しやつた……貴方のあの御言葉が本當か本當でないか、それを知りたかつたのです。

彫刻家。さうか。

妻。何よりもそれが知りたかつたのです。それを知りたかつたからこそ、良人殺しと云ふやうな、大それた恐ろしい事をもする決心がついたのです！

彫刻家。（より力强く）さうか！

妻。それなのに、貴方のピストルは、引金をひいても彈が出ませんでした。いいえ、わざわざ彈が出ないやうにしてありました。さうでないと仰しやることが出來ますか？

彫刻家。それは出來ない。だがね、彈の出るやうにして置く必要もなかつたのだ。

妻。いいえ、貴方に必要でない事が、私には必要だつたのです。

彫刻家。さうか。成程。

妻。ですから、貴方の前に立つた私はもう、四方の壁をガラス張りにした家も同じです。そして貴方は一方の壁に小さな窓をあけただけの、薄暗い室の中にかくれていらつしやいます。貴方の正體は——さうですわ——貴方の正體は、まだ一向に私に知れないのです！

彫刻家。（ユウモラスに微笑しながら）それでは、もう一度試驗をやり直すかな。

妻。だけど、こんな試驗は人間の思附きだけぢや出來ませんわ——運命が手傳つてくれなければ。

彫刻家。さうだ。大きにさうだ。次ぎの機會の來るのを待つさ。

（此時、舞臺右手に當つて突然ピストルの發射されたる音を聞く。その音を聞くと共に、彫刻家は椅子から跳び下りて、其妻の前に大きな盾の如くに立つ。）

（右側窓をゆびさし）彈は正しく此窓からはひつた！

妻。（良人に庇はれるのを辭する如く）ねらはれてゐるのは私です……私だけ打たれればいいのです！

彫刻家。（進み出ようとする妻を左の手に押し止め、右の拳に自身の胸板を打ち叩きながら）お前の爲めには、丁度いい障壁だ！　俺はもう俺自身を惜まない！

（先程の青年の姿が飛鳥の如く、正面のガラス戸の向うへ現れたかと思ふ間もなく、ズドンと二發目が鳴り響く。彫刻家は再び其妻を庇つて立つ。）

妻。殘つてゐるのは一發きりです。私が打たれればいいのです！

彫刻家。（わざと青年に挑戰するやうに）この

障壁は厚く出來てるぞ！　そんな玩具彈にびくともするものか！

（青年は再び飛鳥の如く姿を消し、右側ドアから流れるやうにしてはひつて來る。けれども、左手に其妻を抱きかかへた彫刻家は、青年が右へ廻れば左に庇ひ、左に轉すれば右へ庇ひして、發射の機會をどうしても捕へさせぬ。遂にあきらめたる青年はピストルを持つてゐた手を下げて、ぴたりと一點に立ち停まる。）

青年。（大きく息を吐いてから、仰向け氣味に、極度に絶望的な聲で）駄目だなあ！

（言ひ終るゝ共に、よろよろとよろけるやうにして右側ドアまで退き、それに背を凭せながらピストルを自分の胸に打ち込む。そしてずるずると崩れ落ちるやうにして其處へ倒れてしまふ。）

彫刻家。（妻の顏をのぞいて）どうした？　その顏は？

妻。どつかを打たれてゐるやうですわ。

彫刻家。打たれた？

（寢椅子へ連れて來てかけさせ、妻の體を檢べて見る。）

（妻の左の手を取り）これだね？　肘をやられたな。

妻。（其時を見ながら、はじめて苦痛を感じ出したる如く）やつと、自分でも分つて來ました。

彫刻家。（努めてユウモラスに）しかし、まあ、殺されたよりはいい。

妻。（青年の方を見ながら）切めてこの位の報いは受けなくちや、あの人に對しても濟みませんわ。

彫刻家。それもさうだ。

妻。兎に角私は此騷ぎで、私の知りたいと思つてゐた事を、みんな知ることが出來ました。

彫刻家。みんな知ることが出來なかつたら、これから先きの二人の生活で、氣長に試して見るがいい。

妻。（歡喜の眼を輝かしながら）ねえ、貴方。片方の手がなくなつた爲めに、私もやつぱり、餘計なものが無くなつたのですわねえ！

彫刻家。（大理石像の方を見やりながら）さうだ。お前も、俺の作つた物としては、一通り仕上げが出來たと云ふものだ。（言ひ終つて、倒れたる青年の方を顧み、徐かにそちらへ歩み出すところにて幕下りる。）

（一九二〇年九月）

◇

如何に非凡なる文藝家も、彼が特に文藝家として非凡である限り、文藝上の創作をしてゐない場合、即ち日常の生活に於ては、かなりに凡庸なる人間であり得ることは、改めて說くまでもないであらう。

乃ち一切の天才者をも『人間』化するのだと吹聽しながら、立派に、綺麗に『凡人』化してしまはなければ氣の濟まない、今の文壇の人々は、非凡なる文藝家の本質的價値を見る上にも、專ら日常生活の方面からのみすべきであり、殆んど創作生活の方面からすることを要しないものであるかの如く言ひなしてゐるのである。少くとも彼等をして言はしめれば、それらの文藝家の所謂創作は、彼の性格の極めて皮相的なる部分を代表するに止まつて居り、寧ろ日常生活の記錄であるところの斷簡零墨こそ、殆んど創作としての意味を有しない日記、書簡のきれはしなぞこそ、本當に彼の最も彼らしき處を、僞るところなく、覆ふところなく赤裸々に露出して居るのである。

（『日常生活を偏重する惡傾向』より）